SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.17
2019.01

Chance to challenge

Take Free

Chance to challenge

世界アダプティブ・サーフィン選手権大会 チャンピオン　内田一音氏

インタビュアー・片山清宏　／　文・片山久美

2018年12月。国際サーフィン連盟（ISA）主催、世界アダプティブ・サーフィン選手権大会。アメリカ合衆国カリフォルニア州ラホヤで行われたこの大会のAS-1クラス決勝に、ディフェンディングチャンピオンとして臨む一人の日本人女性がいた。

内田一音。

史上初の二連覇がかかるその試合は世界中から注目され、多くの報道陣が詰めかけていた。ファイナルヒートの試合時間は25分。波はオーバーヘッドでコンディションは悪くない。内田は、沖からくるウネリの盛り上がりに必死に目を凝らす。「絶対に優勝しなきゃ」

焦る気持ちを抑えつつ、試合時間残り3分、内田はこの日最高の波を捉えた一

江の島が遊び場

1972年、内田は藤沢市で生まれた。生まれつき変形性股関節症という左股関節の軟骨が変形し、すり減ることで可動域が狭くなる障がいを持つ。そのため常に左足の付け根に痛みを抱えており、思うように力が入らない。内田は物心が付いた頃から数えきれない程、手術を受け入退院を繰り返してきた。

そんな過酷な状況にあっても、内田が「周りの子どもたちとの差を感じたことは全くなかった」理由は、江の島という恵まれた環境のおかげだったと語る。

「当時は特別支援学級があったわけでもないので、普通の子と同じように保育園や小学校に通っていました。走ることはできないので、体育の授業でできないことはありましたけど、それ以外はできましたから。江の島の中はみんなが顔見知りなんです。私の家も島内で自営業をしてい

ましたし、みんなが名前ではなく屋号で呼ぶような仲でした。今思えば、親が私を特別扱いしないのを島のみんなも知っていて、同じように接してくれていたのかもしれませんね」

「小学校の頃の遊び場は江の島ぜんぶ。島内には小学校はないので、毎日、バスに乗って橋を渡って片瀬小学校に通っていたんですが、学校から帰るとそのまま岩場へ行って釣りをしたり、三角ベースをしたりと日が暮れるまで遊びました。お祭りもあって、いつでもどこでも遊べる場所が江の島にはあったんです」

水泳がアイデンティティに

障がいを忘れさせてくれる楽しい江の島での日々の中でも、年に何度か 1 週間程度の入院を余儀無くされる時期があった。入院中は歩くこともできず、痛みもある。また、長距離を歩く授業、遠足やハイキングではバスに一人で残っていたこともあった。そんな中での内田の楽しみは、泳ぐことだった。

「3歳の頃からお医者さんの勧めで水泳を始めました。これが楽しくて。藤沢の湘南スイミングスクールに通っていました。普段は文章を書くのが大好きで、国語が得意のごく普通の女の子なんです。ただ、『水泳といえば一音ちゃんだよね。』とみんなが言ってくれて、私も泳ぐことには誰よりも自信がありました。スイミングスクールで選手コースに選抜されてからは学校に行く前の朝プールに行き、学校から帰ってきてまたプールへという練習の日々でした」

内田のたぐいまれな運動神経と、目標を定めたらとことん追求していくという集中力。この2つの才能がこの頃から既に芽を出していた。

「小学生の時から多くの水泳大会に出場し表彰を受けました。得意な種目はバタフライで、ジュニアオリンピックにも出場しました。水泳は、私にとって自分のアイデンティティを確立してくれたものなんです。自分には障がいというハンディがあるとは正直思ってなかったですね（笑）」

サーフィンとの出会い

「江の島に住んでいたので、サーファーがいつも身近にいました。私の初めてのサーフィンの思い出は、父が作ってくれたウェットスーツを着たことです。父の友達がRASHの社長さんで、黒にピンクのラインが入っているフルスーツを作ってくれたんです。初めて波に乗れるということより、とにかくウェットを着られることが嬉しくてしょうがなかったことを覚えています」

内田とサーフィンとの出会いは、中学3年生、千葉の海だった。出来上がったウェットを着て一刻も早く海に行きたい一心で、当時住んでいた東京都足立区にあったサーフショップに飛び込んだ。

「ウェットはあります！サーフィンやりたいから連れて行ってください！と（笑）。それで勝浦市の部原海岸に連れて行ってもらいました。初めて波に乗った時のことは今でも覚えていますよ。リーシュコードが遊泳区域のロープなのかな、網みたいなものにいきなり引っかかっちゃって。今思えばとても危険でしたね。最初はなかなか立てなかったけど、シーズン中に立てるようになりました。でも、自動車の運転免許を持っていなかったから当時はそれ以上行く術がなくて」

泳ぎを仕事に

内田は中学、高校でも水泳を続け、自然と高校卒業後は水泳に関わる仕事がしたいと考えていた。高校3年生の夏、水の事故から人命を守るための事故防止、応急手当の方法などの知識と技術を習得する水上安全法の講習を受講した。

当時東京に住んでいた内田にとって、講習会場だった江の島ヨットハーバーは久しぶりに訪れる海。そこで指導員をしていた父の知り合いに「ライフセーバーになってみない？」と声をかけられた。

「海でまた泳ぎたい」

2つ返事で受け、その年のうちに最初の配属先が鎌倉の稲村ガ崎海水浴場に決まった。高校卒業後は東京のスイミングスクールにコーチとして就職した。しかし、ライフセーバーの仕事に魅力を感じて拠点を大船に移すことを決意。大船のスイミングスクールに転職し、コーチをやりながら、夏はライフセーバーの仕事を掛け持つ二足わらじの生活が21歳まで続いた。

「スイミングスクールでは下は3歳児クラスから上は大人のクラスまで、1日6時間くらい水の中に入りっぱなしの生活です。もともとおしゃべりが好きで教えるのも大好きなので全然苦にならなかったですね。ライフセービングでは水上でパドリングをして泳いで人を助けて戻ってくるという専門競技があり、常にパドリング（笑）。泳いでばっかりでした」

稲村ガ崎海水浴場の監視場での2度目の夏。19歳の内田はサーフィンを再開した。ショートボードは体重を大きく移動しなればいけないので、左足に力が入らない内田にとっては技を入れるのもバランスを取るのも難しい。

そんなときに何気なく始めたロングボード。しかし、これが内田の人生を大きく変えることになる運命的な出会いとなった。

「27歳でロングボードに出会いました。友達に誘われて藤沢市の鵠沼海岸で乗ったらすごく面白くて。波に大きな

ラインを描くマニューバー系のロングボードは私に合っていました。沖から岸まで長い距離も乗れるし、波が小さくても楽しめるのですぐにハマっちゃいました」

プロロングボーダーとして活躍

内田がロングボードを始めた2000年当時はまだロングボード女子の競技人口が少なく、大会を探すのも一苦労だった。「ないなら、つくろう」とサーフィン仲間を集いNSA（一般社団法人日本サーフィン連盟）にお願いして女子が参加できる大会を開催してもらった。

そして、内田がロングボードを始めて10年後、女子のロングボード人口の増加に伴い、ついに2009年、JPSA（一般社団法人日本プロサーフィン連盟）にロングボード女子のプロができた。内田は翌年の2010年、プロに認定された。

内田がプロになりたかったのには理由があった。

「当時いつも地元でサーフィンする仲間が、みんな一緒にプロになったんです。プロの大会で遠征するときもいつも一緒。私の足は不自由でボードを持って移動することが難しいことをみんな知っていたから、試合の時は誰かしらボードを運んでくれました。本当にありがたかった。だからこそ、試合ではみんなと同じ条件で一緒に戦いたかったんだと思います。この体で自分がどこまでできるか挑戦したいという気持ちもありました」

プロに転向してから、当時、年5戦、日本各地の大会に出場した。交通費は全て自腹、賞金はスズメの涙だった。試合が終わった後は、普段使っていない筋肉を使うため、左足に痛みが続いた。

そんな努力が実り、地元開催のマーボーロイヤル・カップでは4位という上位入賞を果たし、JPSA年間ランキング8位の好成績を残した。

アダプティブ・サーフィン初代女王に

2015年にISA世界アダプティブ・サーフィン選手権大会の幕が開ける。「アダプティブ・サーフィン」とは、障害を持っている方が行うサーフィンのこと。義足をつけて立って乗る、膝立ちで乗る、座って乗ってパドルを使う、うつ伏せで乗る、サポートを受けて行うなど、5つの身体障害（AS-1?AS-5：数字が大きくなるにしたがって、障害が重くなる）と、1つの視覚障害（AS-VI）、計6クラスに分かれて競技を行う。

第1回大会（2015年）は18カ国、第2回大会（2016年）は4カ国増え、22カ国76名の選手が競技を行った。

プロの世界の第一線で戦っていた内田にとって、そのニュースは耳に入ってきてはいたものの、自分が出場することについてはまったく考えていなかった。

「プロの世界で戦って成績も残していたので、障がい者だけのサーフィンに出ようという気持ちは湧きませんでした。世界大会というのもまだ自分には遠い存在で、私が出場できる女子クラスも当時はありませんでした」

しかし、2016年、NSA（日本サーフィン連盟）から一本の電話がかかってきた。「2017年にAS-1の女子クラスができるから出場してみないか？」

2020年の東京オリンピック・パラリンピック大会に向けて、ボードに立つか膝立ちで乗る「AS-1女子クラス」を新設する予定であるとの話だった。

「自分の気持ちが変わった瞬間でした。世界大会に出たいということよりも、自分と同じくらいの障がいのある他の国の選手たちと会いたいという気持ちの方が大きかったです」

AS-1女子クラスがなかった2016年は現地にも行けず、他の選手の事前情報なども少ないまま臨んだ大会だったが、見事優勝。初代女王の座を獲得し、鎌倉に金メダルを持ち帰った。

2連覇の重圧との戦い

そして2回目のチャレンジとなる2018年大会。内田は出発前、自分の夢を語った。

「昨年の世界大会で衝撃を受けたのは、どんな障がいがあっても海に親しむことができるバリアフリービーチの会場でした。軟らかい砂浜でも、車いすで移動できるようにマットが敷かれ、海にも入れる車いすも用意されている。さらに、出場選手の2倍を超えるボランティアのサポート。一番の驚きは、障がいのある子供たち向けの体験会で、障がいがある選手が障がいのある子どもたちに指導をできるのだと気付かされたことです。私は、日本の海も、誰もが親しむことができるバリアフリービーチにしたい」

健常者と障がい者を隔てる壁はなく、誰もがボランティアになり、誰もがサポーターになることができる。内田が大会で活躍することで、アダプティブ・サーフィンの存在が、そして内田が実現したいと願うバリアフリービーチがもっと注目されるかもしれない。世界大会2連覇という大きな目標を掲げ、内田は出発した。

大会は、ディフェンディングチャンピオンとしての重圧との戦いだった。4人ヒートを2セット行い、上位4人がファイナルヒートに出場できる試合形式。

「メダルを持っている人が連覇することがこんなにプレッシャーを感じるとは考えていませんでした。チャンピオンだから恥ずかしい演技はできない。大会期間中、胃が痛くなり何度も逃げ出したくなりました」

予選を勝ち上がって、いよいよファイナルヒート。試合時間は25分。波はオーバーヘッドのジャンクで横に流されるものの、コンディションは悪くない。通常は選手が手を挙げると審判が自分のポイントや残り時間を教えてくれることになっていた。しかし、会場では風の音と各国の応援が大きくてアナウンスの声が聞こえないため、内田は事前に仲間たちと合図を決めていた。ポイント数が１位だったら緑の旗、2位だったら黄色、3位以下だったら赤色の旗が振られることになっていた。

開始10分後。ふと岸を見ると緑色の旗が上がっていた。「１本目に良い波をつかまえた、まだ１位だぞ」と必死に気持ちを落ち着かせた。さらにその10分後、試合時間残り5分。旗が見つからない。

「黄色は見づらくて見落としてしまったのかも…。もう1本いい波に乗らなきゃ勝てない」。

絶対に優勝しなきゃと焦る気持ちを抑えつつ、沖からくるウネリの盛り上がりに必死に目を凝らした。緊張し体が思うように動かない。しかし、残り3分、内田はこの日最高の波を捉える。

「順位が分からなかったので本当に焦っていました。もう時間切れになると思っていた瞬間、沖からいいウネリが来たのが分かりました。これに乗れば勝てる！無我夢中でパドルし波を捕まえました。最後の１本に全てをかけました」

この波で内田は6点という高得点を叩き出した。ファイナルヒートが終わり、疲労困憊で陸に上がると、内田を含めファイナル選手全員が肩車や胴上げをされた。会場全体が選手に敬意を示し、選手同士も名誉を讃え合い、会場は暖かい雰囲気に包まれた。

「南アフリカの子どもが走ってきて握手を求めてきたんです。その子に『何位だった？』と聞いたら『優勝したよ！』と。去年は嬉しくて泣いちゃったけど、今年は勝たなきゃいけないというものすごいプレッシャーから解放されたことで、その瞬間ホッとして全身の力が抜けました。ISAの会長が走り寄ってきてくれた時に涙がだーっと流れたのを覚えています」

由比ガ浜をバリアフリービーチに

世界アダプティブ・サーフィン選手権大会2連覇の偉業を達成した内田のもとには、現在、テレビや新聞などのメディアからの取材が殺到している。忙しい日々を送る内田に現在の心境を聞いてみた。

「取材を受けるのは正直得意じゃないんです。自分がメディアに出るのは避けていたんですけど、多くの方々の応援のおかげで世界大会2連覇をさせていただいて気持ちが変わりました。自分の活動が障がい者の方々の気持ちを少しでも前向きにできるのであれば、喜んで広告塔になって、障がい者サーフィンのことをたくさんの人に伝えていきたいと思っています」

最後に内田にこれからの夢を語ってもらった。

「日本では、障がい者の30%の方しか家の外に出ておらず、残りの70%の方は家にいたままだと言われています。70%の人たちも機会があれば外に出てもっといろんなことにチャレンジできるはずなのに、その可能性を閉ざされたままの障がい者の方がたくさんいる。その70%の人たちのために私は、今できることをしたいと思っています。まずは、由比ガ浜をバリアフリービーチにして、障がい者が楽しめる海をつくりたい。そして、このバリアフリービーチでの体験が、『障がいがあるからできない』という思い込みのバリアを取り払う体験になってほしい。これこそが、本当の意味でのバリアフリーだと思うのです。『Chance to challenge～誰でも挑戦できる機会がある社会をつくること？』、それが私の夢です」

内田一音の挑戦はこれからも続く。

let's have fun!
配布・設置していただける場所を募集しています

AD

藤沢スマイル歯科医院

いたくない！小児歯科から歯周病治療。入れ歯治療まで

スタッフ募集　笑顔あふれる新しい職場

【募集要項】若干名
【交通費】全額支給（車通勤OK!）
【待遇充実!食事代補助】
【設立】2008年
【科】一般、小児、矯正、審美、予防、ホワイトニング、歯周病治療、
　　顎関節治療
【休】完全週休2日制（水、祝、他1日）※祝日週の振替診療なし
【就業時間】（月、火、木、金）10：00〜20：00
　　（土、日）10：00〜18：00　各日休憩90分
【他】夏季5日　冬季5日

トレアージュ白旗2F医療モール（小田急江ノ島線　藤沢本町から徒歩5分）
無料大型駐車場あり
HP　http://www.fujisawa-smileshika.jp

NPO法人湘南ビジョン研究所は
ブルーフラッグ取得をサポートしています。

由比ガ浜海水浴場はSOSを応援しています。
SOSとは、「SAVE OUR SHORE! 私たちが海のためにできること」をスローガンとした神奈川の海を安心で心地良く過ごせる環境に取り戻すための取り組みです。ビーチクリーンアップを中心に、ライフガードとの連携をとりながら海岸域の安全確保活動をすすめながら、SOSのロゴマークを積極的に露出して、全ての世代の人たちに海を守ることの素晴らしさを広げる活動を推進しています。

湘南VISION大学　授業の詳細・申し込み・お問い合わせ：
FB：https://www.facebook.com/shonanvision/　　HP：http://shonan-vision.org/
申込は、Facebookイベントページの参加ボタンを押すか、info@shonan-vision.orgまでご連絡ください。
延期又は中止の場合は、Facebookイベントページ上又は湘南ビジョン研究所HPでご連絡します。

SHONAN VISION
Social Magazine
Vol.17
2019.01

PUBLISHER：片山清宏
EDITOR IN CHIEF：片山清宏
ART DIRECTOR：大戸千尋
EDITORIAL STAFF：片山久美
COVER PHOTO：片山久美

http://shonan-vision.org/
@shonanvision
info@shonan-vision.org